

発題

## ハヤトロギアの視点による 生・死と他者問題の現場

宮本久雄

本論は人間の生死の問いをハヤトロギアと他者論の視点から追究する。その際、生死は象徴的意味で捉えられ、他者と生死の空間が共に祝祭的空間を創出することが論ぜられる。しかしその前にハヤトロギアの内実を大略解説しなければならない。

### 1.

ハヤトロギアとは一口に言えば、西洋的存在論あるいは「存在一神一論」(onto-theo-logia)がかかえる存在の実体的自同的理解とそれに拠る空間的世界・文明・社会表象と実践・制作に対してヘブライ的存在・ハーヤーに拠る脱自的差異化的協働態成立の可能性を探る哲学であると言おう。それでは「存在一神一論」とはどのようなもので、「生者・死者」の問題とどのように関連するのであろうか。

ハイデガーやE・レヴィナスによると「存在一神一論」のモデルはアリストテレスの存在形而上学にみられると言う。すなわち、その論(ロゴス)は最普遍的な概念「存在」に拠って全世界を対象化し、その存在世界を第一原因(神)から発する原因の因果的連鎖で統一回収する。そこには個としての個の意義や価値は、一般的概念に同化される。つまり、生者(個)は死滅するのである。こうした「存在一神一論」は近代形而上学(デカルトなど)にあっては、神のかわりに計算する理性が座を占め、世界を物理数学的法則の

---

---

網の目として再構築する。そこでは従来の生活世界にかわって物理的世界像が一切を隠して顕現する。まことにフッサールも言うようにデカルトやガリレイは「発見の天才であると同時に（生活世界や生者の）隠蔽の天才」なのであった。こうして近代以降も、生者は無機的科学像の中に死者として解消されている。レヴィナスなどによると、帝国主義や最近のナチス・ドイツ、スターリニズムにみられる全体主義とその絶滅収容所における個や民族的生者の抹殺事件の思想的温床は如上の「存在—神—論」にあるとされる。われわれはその意味で、現代全体主義の根、個を歯車として全体に解消する「存在—神—論」型思想をヘーゲル歴史哲学や唯物弁証法の中にみることができよう。

こうした「忘却の穴」（H・アレント）に葬られ死者となった人々との出会いを模索しつつ、他方で彼らを葬った全体主義さらに物質文明の消費社会に生きる生者（これは実は疑似生者なのであるが）に他者性の自覚をうながし、上述の二項（死者と疑似生者）の間に生き思案しながら、両者を止揚して生命的協働態創出の地平を拓開しようとするのがハヤトロギアである。

この言葉はオントロギアの実体的存在理解に対して、その存在を突破しダイナミックな存在理解をヘブライ的存在に拠ってもたらそうとした故有賀鉄太郎教父哲学研究者による造語であった。論者は、その内実を如上の現代的他者問題のコンテクストで深めようとする。そこで肝心のハーヤー理解の手がかりとしてヘブライ思想の精華『旧約聖書』の歴史物語「出エジプト記」をとりあげたい。論者はここで他者との出会いや生者と死者（生と死）の協働態、その根底にあって働くハヤトロギアをも含め、およそ自・他の自己同一性（先の全体主義的他者排斥の自同性に抗する鍵語）を「物語的自己同一性」（Narrative identity）の視点からとりあげておくことを予示しておきたい。物語論とは、野家啓一氏を引用すれば、世界の構成要素を事物でなく出来事と考えることであり、その上で、物語り行為とは「時間的に隔たった二つ以上の出来事に言及し、それらを一定の時間的文脈の中で筋立てる（plotting）

---

---

言語行為である」とされる。この物語り行為によって統合された説明可能な経験と行為のネットワークこそ自己に外ならない。この説明可能性・自己物語りは常に他者に開かれており、「無規定箇所」を含むことで他者の解釈に開放されている。

このように物語を語ることが「自己同一性」の創成となり、また他者との出会いに向けられる。

もっと具体的に言えば、例えば国民国家成立の物語が想起されるであろう。米国の独立宣言は、抑圧支配の英国に抗して「自由への権利」「自由の国」の自己同一性創出の物語りの起点・根底（アルケー）になっている。それはその旗印のもとに、ナチス・ドイツに抗し、共産主義に抗してますます自由の国の生の物語りを世界にうたい上げた。けれども、ベトナム戦争や最近の対イラク戦争に至り、この物語りとそれによる自己同一性はむしろ自同性（死）に化石化してきていないであろうか。

他方で物語論は、歴史的弁証法などの歴史学に隠され忘却され死の圏域におかれていた少数民族や死者の記憶を掘り返し、新しい生の物語を今日のわれわれ生者・亡者につきつけている。日本では、アイヌ物語、琉球の物語などが語られている。こうして論者は物語論を他者との出会いを媒介とする新生の出来事へと結びつけようと試みる。以上をふまえハヤトロギアの物語的文脈に簡単にふれてゆこう。物語のコンテキストは、エジプト帝国に隷属していたヘブライ人奴隷がヤハウエ（ハーヤー存在と関係する名詞）神とその予言者モーセによって自由で自律的な民に創出されてゆくプロセスである。さてヘブライ人奴隷という他者、一般に無意味、無価値とされた人々の苦悩の呻きを知ったヤハウエは歴史的世界内へと越境して彼らの許に「降下して行き、エジプト人の手から彼らを救い出す」（三八）決意をし、そのためにモーセに奴隷解放の指導者になるように呼びかけるのである。けれどモーセはその重い使命にたええず呼びかけを拒む。しかし「汝と共に在る」というヤハウエの言葉に全身巻きこまれ、その名を問う。当時「名」を知るとは、そ

---

---

---

の名の持ち主の力を授与され、彼をコントロールすることさえできると思われていたからである。その時開示された神名は、現代に至るまで翻訳者を翻弄した謎にみちた名「'ehyeh 'asher 'ehyeh」(在りて在らん者)であり、存在動詞の一人称未完了形の反復が関係詞「アシェル」で結ばれている構造になっている。この歴史物語の文脈とヘブライ語意味論からすると、神名の意味内容に関する大略次のような了解が成立している。すなわち、このハーヤー存在は行為が自己完結せず不断に未完了な存在態を示し、それはヤハウエが天から歴史的世界へ降下し奴隷の呻きに応え共に歩みつつ共生の協働態を創出する点を意味する。その点を考えると、ハーヤー存在とは自己の在り方を差異化し、他者の在り方をも差異化しつつ共生の空間を創る働きをも意味していると考えられる。さらに「アシェル」に媒介される存在のparonomastic formula は、この神名開示が答えでありかつ答えでないという両義性をも示そう。それはすなわち、人間が神名知によって神をコントロールしようという魔術・偶像化の拒否と言える。それはさらにヤハウエが人間の力に還元されない他者として人間に関わろうとする自由で無償のハーヤー的存在の他者性を示す。こうしたハーヤー的意味をハヤトロギアは示し、自己中心的実体的自己同一(レヴィナスの *le même*)を突破し、他者との共同態的地平を思索する。

## 2.

それではハーヤー的存在の差異化に巻きこまれたモーセ以外に、同様にハーヤーを体現した物語の人物としてアブラハムをとりあげ、ハーヤーが自己脱自し(ある意味で自己に死に)、他者との共生を生きる(死からの再生)という具体を考究してみたい(『創』十二～二五章)。

その具体はアブラム(後にアブラハムに改名)の放浪の、遊牧の生にまず窺われよう。彼は次のようなハーヤー的差異化の言葉を身に蒙って出発した。

---

---

---

「あなたは生まれ故郷、父の家を離れてわたしが示す地に行きなさい」(十二1)。彼は生まれ故郷メソポタミアのハラシムからカナンの地に向かい、カナンからネゲブ荒野を通過してエジプトへ、さらにエジプトからネゲブ、結局ヘブロンに落ち着く。かと思うとそこからカデシュとシュル荒野の間のゲラル、つまり異邦ペリシテの地に滞在し、ベエル・シェバにも住む。長寿を全うしてヘブロンに葬られた。その流浪を通して彼は地理的・文化的さらに精神的に様々な地を越境し、様々な事件に遭遇した。その遊牧的生は一方では定着的自同性に死に脱自し遂には存在の根源的自同性を象徴する故郷にも回帰しない生であり、それゆえアブラムが万民の父(アブラハム)になるという新しい自己同一性・再生の道程であったと言える。他方でその越境の道程は広義には、自同的文明・文化定住地域と砂漠という非定住域を二項となすその間・境界(frontier)を歩み通す旅であった。それは生と死の間、つまり疑似的生と死との間、二つの切り離せない二項の間を差異化し新生を求め続ける辺境を辿る旅なのである。

ハーヤー体现の具体例は、アブラハム物語中に様々な語られているが、余りに有名な「イサークの犠牲」をとりあげたい。この物語に関してキルケゴール、E・レヴィナス、J・デリダなどが各々独自に宗教的・倫理的解釈をしているが、ここではただ物語の差異化に注目してみよう。

イサークはアブラハムとその部族の未来における地上的繁栄を約束する祝福の子・正嫡子であった。この擬似的生の自同的項に対しヤハウエはイサークを「焼き尽くす<sup>ホ</sup>犠<sup>ロ</sup>げ<sup>ク</sup>もの<sup>ー</sup>」として献<sup>エ</sup>げ<sup>ス</sup>ることをアブラハムに命ずる(イサークの死のテーマ)。それは彼にとって自同的祝福に対する呪いの如き差異化という対極項となった。彼はこの差異化をそのまま蒙ってイサーク奉獻を通して自同を脱し、新しい意味で「アブ・ラハム」(諸々の民の父)と成り祝福を受け、協働態の地平を披いた(アブラハムの死と再生のテーマ、同時にイサークの生のテーマ)。こうして祝福の正嫡子、擬似的生のイサークは犠牲の死をくぐりぬけ、真の生に至り、そこで彼は父アブラハムの協働的生

---

---

へ参与しえたわけである。

このようにハーヤーを体現してアブラハムは、死と生、妻サラの不妊と多産、地上的祝福などの二項的差異の間を生きたとと言える。それは象徴的に語れば、死と生の間にも他者とめぐり会いつつ祝祭的空間を創出する遊牧の脱自的生であった。ここで祝祭的空間と言うのは、その脱自的道程が魔術にではなく、ハーヤー的存在に祭儀的に献げられた協働態創出の出来事だからである。さて次にこのハーヤー的差異化の問題が現代においてどのような兆候や様相を呈しているかにいささか言及してみたい。

### 3.

20世紀は「難民の世紀」とも言われる。

この難民こそ、世界の諸国家、共同体、民族、文明文化、言語などに差異化をもたらしているのである。それはどういうことか。

すでにH・アーレントは「国民国家の没落が同時に人権の終わり」（『全体主義の起源』）であることを、膨大な数の難民の出現によって洞察していた。というのは、彼女は、国民国家から排除され今や諸領土諸国家に非市民として流入して国境を無意味化する難民（無国籍者）の群れこそ、次の事態を証すると思う。すなわち、それは国家の政治・法体系の保護なき状態が人権・国籍の喪失であり、逆に人権は国家に市民として生まれ記入され市民的権利をもつことに由り生ずること、従って抽象的な「人間としての人間」は生得的アプリアリに人権をもたないこと（人権の終わり）を示す事態だと暴いていた。だからG・アガンベンは、今や権利をもった人間や市民、主権者としての人民や国民という国民国家の基本的概念を放棄して放浪の「難民」から新しい政治哲学の再構築を主張している（『Mezzi senza fine』（目的のない手段）1996.『Moyens sans fins』Paris. 1995.『人権の彼方に』（高桑和

已訳、以文社、2000))。

以上のように難民の存在は、国家＝国民＝領土という三位一体に拠る国民国家の没落を示し、1789年の仏「人権宣言」以降の国民国家の物語的自同性に対して、無国籍者という他者の新しい物語をつきつけている。そう考えると現代世界にあって国民国家とその疑似的生の物語に対し無国籍者（難民、亡命者、密国者なども含む）の死の物語が対比され、その差異化は、多数派民族、文化、国家、言語などあらゆる分野で生じていると言っても過言ではない。

それではその差異の境界（the Between）に立って今どのような仕方では他者・無国籍者との出会い、人権や協働態の物語が語られうるのであろうか。

ある人はマルチ・カルチュラリズムの方向に、またある人は国民国家に替わる連邦的世界国家の構想に、またある人はエスニシティの中でもエスノ・デモクラシーの方向に活路を求めようとするであろう。

この問題に誰も即答はできない。しかし、この難民と国民国家の差異化をひきうけ、その間を未知の辺境として歩み、学習し解釈してゆくことが、例えば現代における死（無権利な難民）と国民国家の疑似的生との間に、新生（難民協働態）、つまり祝祭的空間の創出に連動しうるのではないか。

その外に現代の生死の境界は、食の独占的支配（市場操作）と飢餓、医療産業社会の生死と貧困圏での生死、地球的生命・生態系の保護と破壊、搾取と抑圧、支配と拷問、宗教的非寛容と寛容、情報独占による生（情報利用操作）と死（無知）の境界など様々な境界の差異を示している。そして実に今「生」と名指した圏域は本来のな生でなく死を産み出し、他者をも抑圧しうる疑似的生であり、従って以上の意味での生と死との間に、共存と寛容と和解の祝祭的空間をどのように創出できるのであろうか。それが大きな問いとなる。

---

---

---

#### 4.

ハヤトログアは上にあげられた境界の固定化や実体化という死に直面し疑  
似的生の虚無を暴きつつそこから脱自して、そこに流動化をもたらし、そし  
て思索し科学する者自らその境界の最前線に立ちながら、新しい他者の物語、  
つまり止揚された生者と死者との公共的コミュニオンを語る方向に不断に指針  
と方位を見出す。それが自ら「存在一神論」知に陥らぬためには、他者を  
自らの鏡とし砥石としてゆく。現代的生と死の間に位置しつつ共存の地平を  
披くために。

今回のCOEのテーマ「死者と生者の共同性」とは、以上の意味で生・死の  
間を歩むハーヤー的存在（個であれ協働態であれ）を媒介に、滅私奉公でも  
滅公奉私でもない協働態、宇宙のスケールの生命的連帯から歴史社会さらに  
市民的公、家族的協働態へと向かう、それ自ら死生をかけて死と生の間をむ  
すぶ途行きに外なるまい。

(みやもと・ひさお 東京大学大学院総合文化研究科教授)